



弘法大師傳記 九



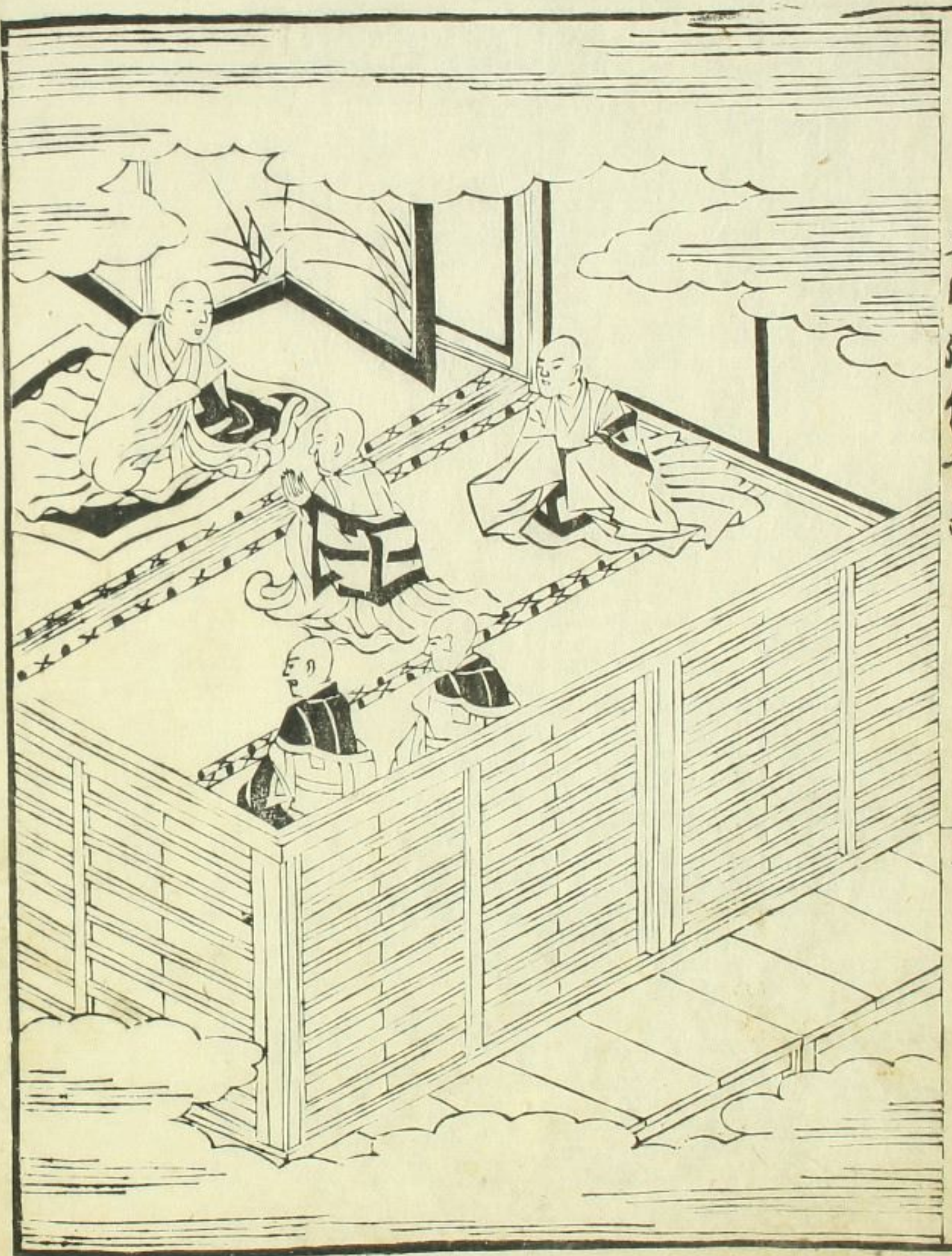
4
597
9



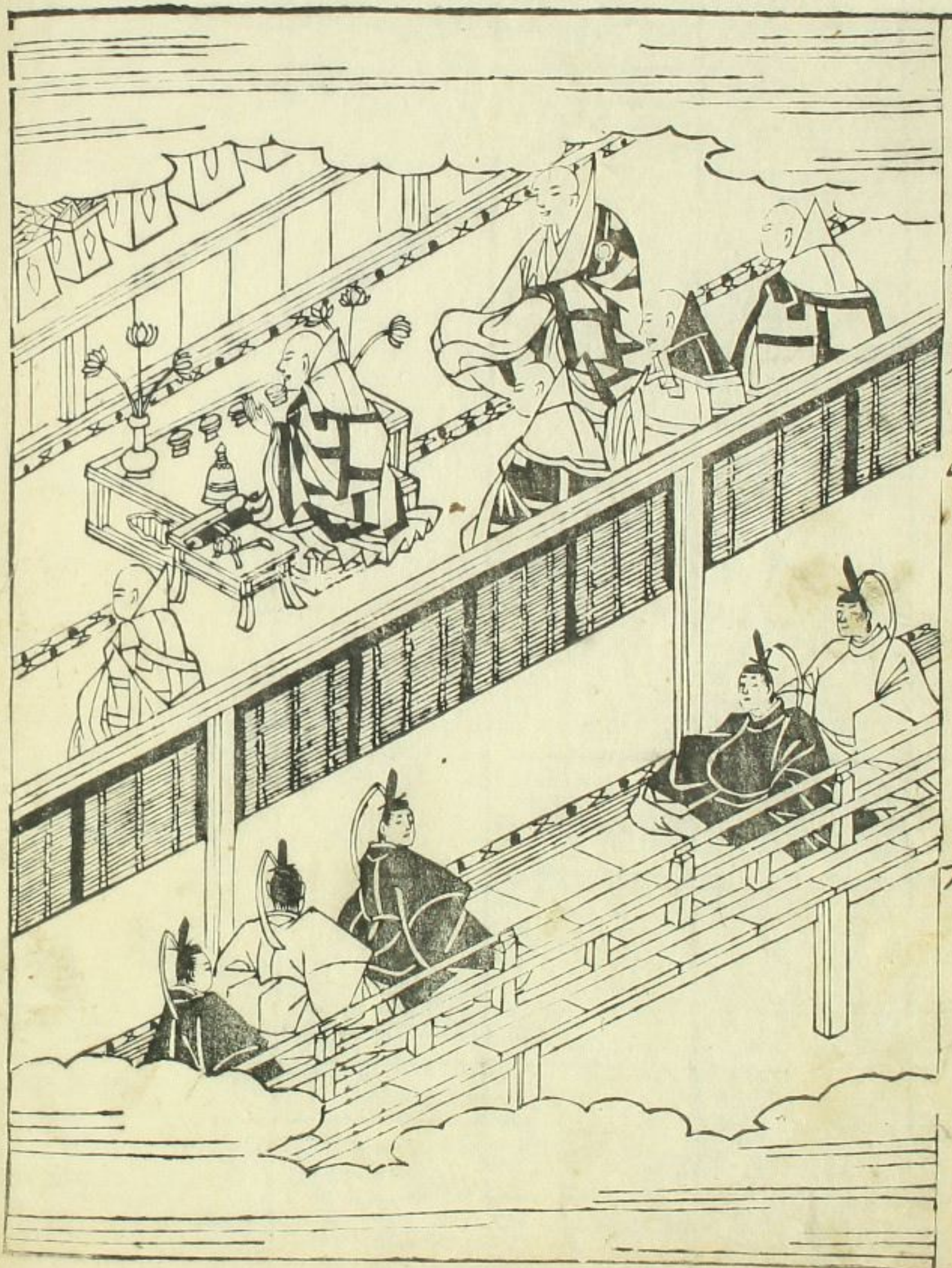
弘法大師法苑珠林卷第九

目録

良房卿一家の夜と法苑抄事
うしろのやうり け やうり
 惠果齋と救済抄事
けいさう けいさう
 皇嘉門の歌乃字力事と法苑抄事
こうかもんのかのじりき けいさう
 七日の法苑抄事
にちのけいさう
 其の親王御影と書苑抄事
そのおんみょうのうしろ けいさう
 御影云乃事
おんみょうのうしろ



空海と信成の交りみかへくしあはれしをなほにのりて
 まさの恵果のありありいふしつらりよよの
 語りぞあられせくく様おし給ふまのちか
 さのしどろくこころふじついで礼ねしたまひ
 といふをあらわしなりはよまのゆゑの百枝よ
 かんまづひよあまの海のおそいこれら
 ありの教の文字を力に張庵とあさりの
 一のあつ百枝りねのゆえのちか
 けがへし一人の力ささりてゆら
 りとくしあはれしをなほにのりて
 枝れどろくそのさゆとあさりのちか



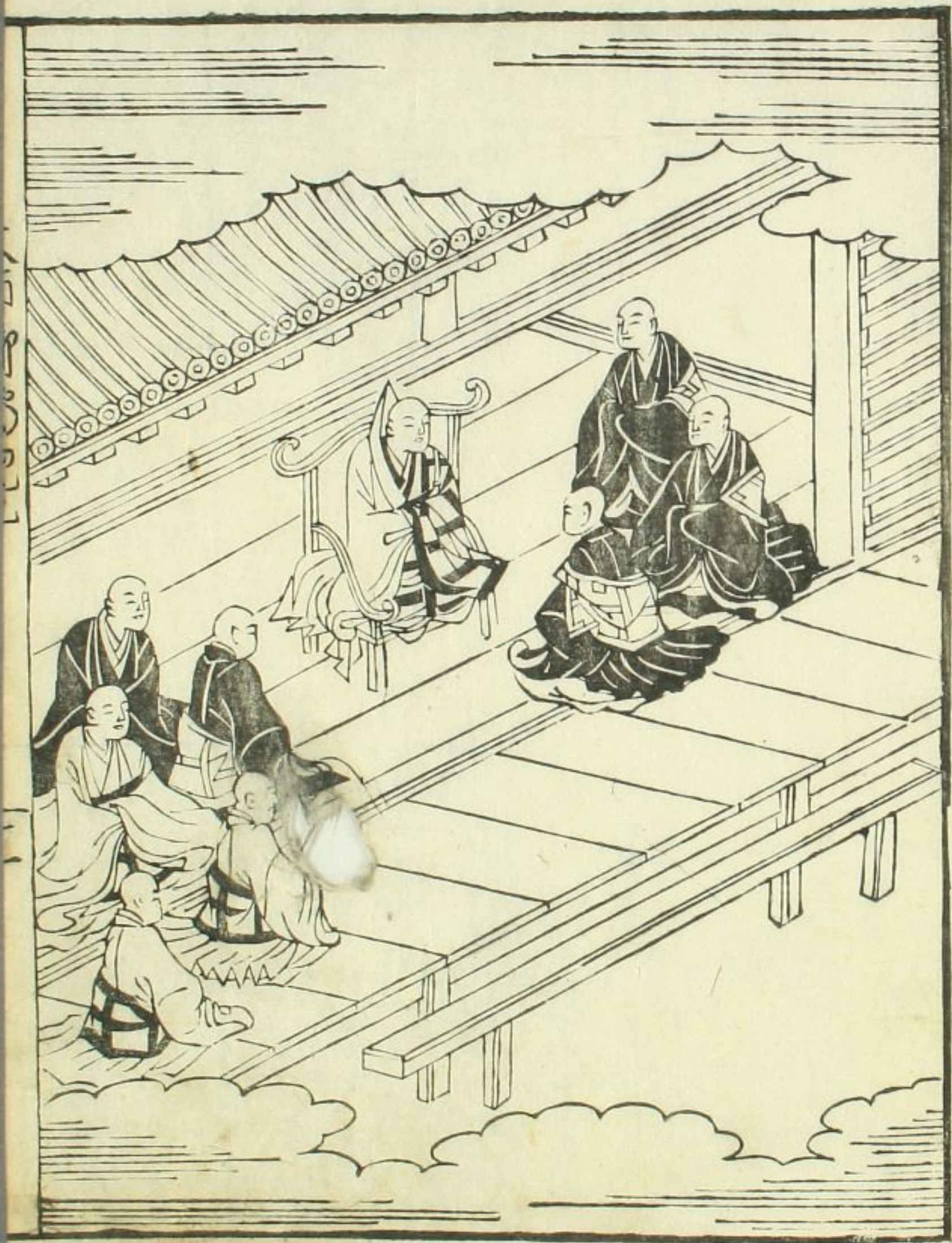
大佛の御座り

六

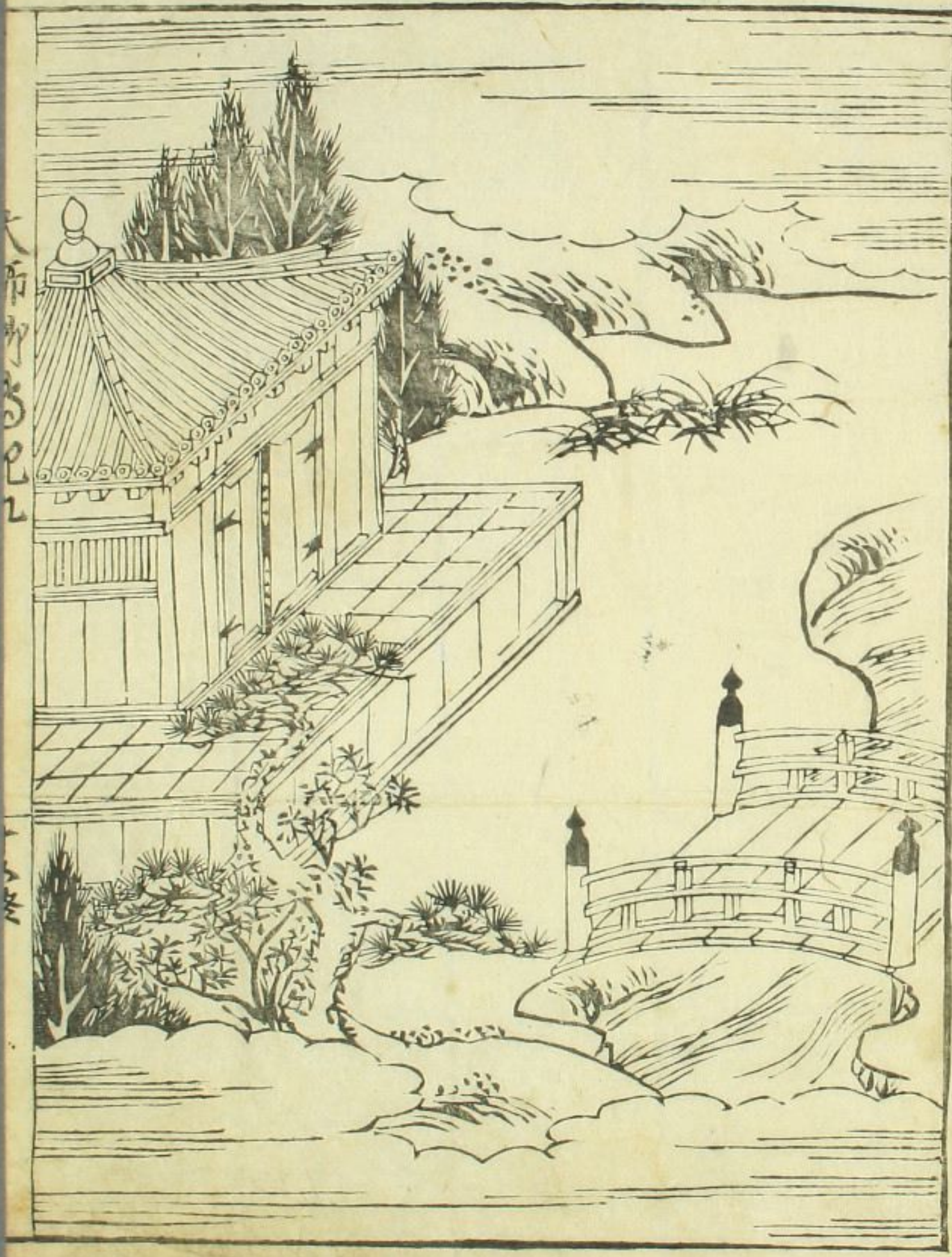
ましてはせんであはれあふてあたまてえい
 りんゆきふあぞむ代乃見うとあ帝乃名はと
 きりんちやうの樓よのそんでるあを神とわい
 きたまはさういあ。とて大脚山御初よりこの
 たけがんとはと免あふ事。ゆ余をなかり。
 そかあつひいさつあん乃らんちやう又ハ妙持者
 ありあふひは伝教殿の十八日れ報善候又い善を
 の毎日乃山御んあめさじ。色くれ山御と定あて
 くれしとては御らまてあこころとあてとて
 ああとちりの御とこのおのまことれはせん。合
 やまんすああさあんげんのとてえよ御す

大佛の御座り

六



さて又藤和二年三月十五日は入定より始りて
 終りてやにがりありて又のひては定よりして
 一より多きは我入定より今年三月廿一日
 寅の刻也。あつては中子も出立するもあつて我も
 かりら入定の日はあつては我も出立するもあつて
 我も我よりして春願とくもあつて我も我よりして
 藤和二年三月廿一日は入定より始りて終りて
 世よあつては我も出立するもあつて我も我よりして
 の中子もあつては我も出立するもあつて我も我よりして



大師の入室のるのなんといまこを何のしつとあ夫
之竊は山乃何よあぞらへ流小家天家持流はまき流
乃流定よ十種乃はと流の第十よいらく二流をた
あ。三流と流流して絶きらんといりされたる流
の樹下小流。あ今も流の出世よつらまぞあ流
此福利と流。流流の専命とらぐをりしとを流
流よび流の祖師といふといくぞく流流大師よあび
流のびまやわりごとく流まらたや



